

mediopos 6

2015.3.21 ~ 2015.4.14

【神秘学ポエジー～風遊戯 第17集】

media-photo-poesie ヴァージョン

神秘学遊戯団



■白川静『文字遊心』（平凡社ライブラリー 1996.11）

「どのような生物でも、自己のテリトリーをもつ。そのテリトリーを守るためには、イノチをもかけようとするものである。人の生活でいえば、それは「かき」である。人の生活は複雑であるから、その社会にはいく重もの「かき」がある。「いへ」「むら」「さと」「くに」などがそれぞれの「かき」をもち、他に対して「さかひ」をもつ。人はその境涯に生きるのである。」

「道は古くは導とかかれ、首を携えて道を行くことを示す字であった。一たび「さかひ」を出て、異族邪霊の支配する地に入るのには、きびしい呪禁の方法が必要とされたからである。（・・・）／境界の安全を保つために、人は邪悪なるものを境界の外に放ち、永遠にこれを隔て、塞きとめる必要があった。邪悪なるものを「はなち」「へだて」「ふさぐ」のである。」

はるかな旅に出るならば
境を超えてゆかねばならぬ

境には邪悪なものがすみ
超えてはならぬと牙をむく

みずからを顧みず
邪悪なものと争うなかれ

それはみずからの姿であると知らねば
ならぬ
未熟ゆえに映し出された鏡像なのだ

境を超えてゆくためには
みずからの鏡像を超えねばならぬ

はるかな旅に出るならば
己の境を超えてゆかねばならぬ



■山本七平『無所属の時間』（旺社 1981.2）

「人類が文化を創造して以来、個人は何らかの対象に所属してきた。その対象は、時代によりまた場所により異り、またあるときは具体的対象であり、あるときは抽象的対象であった。／家族、部族、民族、共通祖先、国家、組織、宗教団体、思想団体、地域社会等々から、共通の概念、共通のスローガン、共通の主義・信条等々に至るまで、何らかの対象に人は所属して生きてきた。」

「一人の人間の生き方は、あるときはその判断の基準に『個』が表に出て『所属』が裏にひそみ、あるときは『所属』が表に出て『個』が裏になる。とはいえ、この両者は一体で、人生は、長いテープのこの表裏がよじれた形でつづいており、ときによって、表が意識されたり裏が意識されたりしているにすぎない。従ってすべての人に『個の面の時』、すなわち『無所属の時間』があるはずであり、これがなければ人は人ではない。」

「だがしかし、われわれが所属しているのは前記のような対象だけではない。おそらく明治以降の大きな特色の一つは『時への所属意識』である。組織とか団体とかへの所属は、それから離れたときに、それへの所属の時から解放されるが、『時への所属意識』は、人が、自らの意志で自らを解放しない限り、解放されない。そしてこの『時への所属意識』は、時代の流れ、御時世、歴史の流れ、といった表現に如実に現れ、多くの人は、それに所属することは一つの宿命であり、従って前述の『個』の面が出た場合も時への所属からは解放されず、その意味では、人に、『無所属の時間』は存在しないと信じられているのである。そしてその『時間』は進歩と呼ばれ、人はその時間に所属していれば、この時間は『流れ』のように流れて、人を必然的に進歩さす。従ってそれへの所属は善であり、それへ所属しないものは悪である、と信じきってきた——どこにも、そのような保証はないのに。」

ぼくがぼくであるために
ぼくにはぼくの時間がある

ぼくが仮面に生きるとき
ぼくにはぼくの時間がない

ぼくがぼくであるために
ぼくにはぼくの場所がある

ぼくが仮面に生きるとき
ぼくにはぼくの場所がない

ぼくはほんとうは nobody
ぼくはほんとうは nowhere

ぼくがぼくであるために
ぼくは時空を超えて生きねばらぬ



■鈴木エドワード『神のデザイン哲学』（小学館 2013.7）

「私たちの世界には「愛」もあれば「憎しみ」もあり、「善」もあれば「悪」もあります。すべてが二重性で成立しています。／「テンセグリティ」の話を思い出してください。テンセグリティも二重性で成り立っています。テンセグリティ構造は特殊な構造システムで圧縮材と引っ張り材で成立しています。非常に際立った特徴は、他のシステムと異なり、圧縮材同士が「不連続」で互いに接触することなく「連続する」引っ張り材によって各々の位置の均衡を保っているということです。圧縮材と引っ張り材が関係性を保つことによってテンセグリティは成立するのですが、全体を結び付けているのは引っ張りの力なのです。／引っ張りの力は宇宙の成り立ちそのものです。太陽や地球、月、すべての惑星たちはは浮いているわけではありません。テンセグリティ構造なのです。圧縮材である惑星たちは引力という引っ張り力により互いの存在位置を規定され、保ち合っているのです。／テンセグリティ構造で引っ張り力が全体を結び付けるためになくてはならない決定的な存在であるように、宇宙の均衡にも引っ張り力はなくてはならない存在なのです。神はすべてを引っ張り力で関係づけるようにデザインしたのだと思います。そして、その究極の神のデザインは、「愛」という引っ張り力で生きとし生けるものをつなぎ結び付け、関係性を保っているのだと思います。私は「愛」こそが、神が創造したこのテンセグリティ宇宙の偉大なすべてを結ぶ引っ張り力だと思うのです。」

*テンセグリティ (tensegrity) : バックミンスター・フラーにより提唱された概念。Tension (張力) と Integrity (統合) の造語。

ぼくはここにいて
きみはそこにいる

ぼくときみは
手を取りあって

ぼくときみは
見つめあって

ぼくときみは
結びあって

ぼくときみは
空の星のように

ぼくはきみへ
きみはぼくへ

ぼくはきみを求め
きみはぼくを求め

ぼくはここにいて
きみはそこにいる

mediopos-129

2015.3.24



■ブルース・チャトウィン『ソングライン』（英治出版 2009.2.28）

「神話の世界では、みずからを「正しい死、へ導く者こそが理想的な人間とされている。その境地へ達した者が「帰還、を果たす。／オーストリアのアボリジニは、独特のルールに従って「帰還、する。正確には、自分の属するところへ、自分の「始まりの場所、へ、自分のチュリングが保管されている場所へと至る道を、歌いながらたどっていく。そうしてようやく、その人間は「先祖、になる―あるいは、ふたたびなる―ことができる。これとよく似た考え方が、ヘラクレイトスの謎めいたことばからも読みとれる。「死すべき者も不死の者も、死のなかで生き、生のなかで死んでいる」]

生の森で踏み迷ったときには
はじまりの場所を思い出すことだ

はてない旅に出る者もやがて
歌とともに始まりの場所へ

死をおそれることはない
生は死から生まれたのだ

生をおそれることはない
死は生のなかにあるのだ

ときに迷路をさまようとしても
すべての道は永遠へと続いている

mediopos-130

2015.3.25



■笹井宏之『ええんとくちから』(PARCO 出版 2011.1)

「ええんとくちからええんとくちから永遠解く力を下さい」
「からだにはいのちがひとつ入って水と食事を求めたりする」
「空と陸のつかい棒を蹴飛ばしてあらゆるひとのこころをゆるす」
「やむをえず私は春の質問としてみずうみへ素足をひたす」
「わたくしは水と炭素と少々の存在感で生きております」
「こころからひとを愛してしまった、と触角をふるわせるおとうと」
「社会的すっからかんがある朝に泉になっていることもある」
「風という名前をつけてあげました それから彼を見ないので」

どうしてぼくは
ここにいるんだろう

生まれてからずっと
となえ続けている間いがある

だからぼくは
ここにいるのだ

そう思えるときが
答えなのだろうか

そう思えないときは
どうなんだろうとまた問いながら

mediopos-131

2015.3.26



■マニエル・リマ『THE BOOK OF TREES / 系統樹大全：知の世界を可視化するインフォグラフィックス』(ビー・エヌ・エヌ新社 2015.3)

「樹木の再帰的な分岐構造は、知識を体系化するための強力なメタファーとなる。コンピューターのハードディスクドライブ内のフォルダー階層構造を表示する方法として矩形樹マップ法を開発した当時、私の関心は樹木のメタファーに向けられていた。(・・・) / マニエル・リマの本書は、樹形ダイアグラムの歴史を叙述した優れた著作だ。本書を紐解けば、樹形メタファーが魅力に富み柔軟なツールだからこそ 800 年以上も生き続けたことが理解できる。枯葉、樹形ダイアグラムの歴史と文化の交差を綿密に辿り、人間が成し遂げた多くの分野が樹形構造によって図示され解明されてきたことを明白にした。樹木の自然なかたちとその様式化されたデザインはさまざまな変異をともなって現れ、それぞれ魅力と美德と効用があった。ある樹形は浅くて広いが、別の樹形図は狭くて深い。また深さが一定でバランスがとれた樹形図もあれば、分岐パターンが変動し、深さがばらばらの樹形図もある。(・・・) / 昔から樹木は詩人の創作意欲をかきたててきた。(…) 人間の目から見た樹木は、ときとして自然なインスピレーションのように美しい。しかし同時に樹木には、こぶがあったりひび割れていたりねじ曲がっていたりして、どうしようもないことがある。それでもなお、樹形図を論じ尽くしたこの魅力ある本を手にした読者は、樹形構造のもつ新たな用途、解かれるべき新たな問題、そして自然の美をどのように頼りにすればいいのかについて思索を巡らすことだろう。」(ベン・シュナイダーマン：序文より)

みずからを樹木として
屹立させよ！

大地に根を張り
天に向かって枝をのばし

根を枝を
どこまでも分岐させ

想像力よおまえも
樹木となり繁茂せよ！

どこまでも深く根をのばし
地下の迷宮さえも渉猟し

どこまでも高く枝をのばし
天の秘密へと光を求め

みずからを樹木として
屹立させよ！

mediopos-132

2015.3.27



■竹村真一『cosmic tree』（慶應義塾大学出版会 2004.6）

「外的に森林保護を叫ぶのでなく、また樹木との気の交換をいたずらに神秘化するのではなく、人間自身の一面的なありかたへの問い直しを通じて、人間の文化のなかに樹木の世界経験と交差するインターフェイスをデザインしようとする意思——。／もっとも三木成夫流にいえば、私たちの身体は「植物性器官」としての内蔵系（内胚葉）と「動物性器官」としての脳神経系／感覚系（外胚葉）の複合体であり、植物的な「遠」の感性とリズムで、天体の動きや季節変化に呼応しながら栄養・摂食や性・生殖の活動は営まれている。つまり、私たち「人間」の内部にも動物的な側面だけでなく、植物や樹木に通底する生のモードが潜在しているともいえる。／となれば、樹木をお手本にするというのは、何も自分の外にある指標に自分を合わせるということではなく、むしろ自分の内側に眠っているさまざまな生命記憶を、もう一度自己という進化の実験場に再統合していくプロセスともいえる。動物や樹木を演ずることは、そうした意味での内なる異種間コミュニケーションの試みなのだ。」

見るためには
内なる光を
目覚めさせねばならぬ

樹と交感するには
内なる樹を
目覚めさせねばならぬ

いまわたしのなかで
ひととの樹が立ち昇り
天へと向かってのびてゆく！

はるかに眠る記憶よ
静かに確かに目覚めるのだ
天と地の万象をむすぶために



■若松英輔『霊性の哲学』（角川選書 555 平成 27 年 3 月）

「言葉の出現は、人びとの内心の求めの顕れであることがあります。近代になって、民衆の心のなかにすでにあって、しかし容易に言葉になろうとしない宗教感情が、霊性という言葉で表現され、発展していきます。／しかし、「霊」「霊性」という表現が、その本来意味していることとは異なるものとして認識される状況が生まれる。現代は、「霊」あるいは「霊性」という言葉を、その源泉にさかのぼり、原意を知り、それを内で育む前に消費したのです。しかし、それは今、霊性という言葉を用いない者によって「いのち」という表現となってよみがえってきつつある。／霊性はかつて、宗教者や哲学者によって語られた。しかし、現代は必ずしもそうとはかぎらない。（・・・）／「霊」なるものと「生命」「いのち」を統合すること、これらの言葉が生まれる軌跡とその異同を見すえながら、「いのち」の霊性と呼ぶべき地平を切り拓くことが急務です。」

霊が幽霊になるとき
わたしもまた幽霊になる

霊が精神になるとき
霊からからだ失われる

霊がいのちになるとき
霊から生命でないものが失われる

霊が厭われるとき
わたしの源への道も厭われる

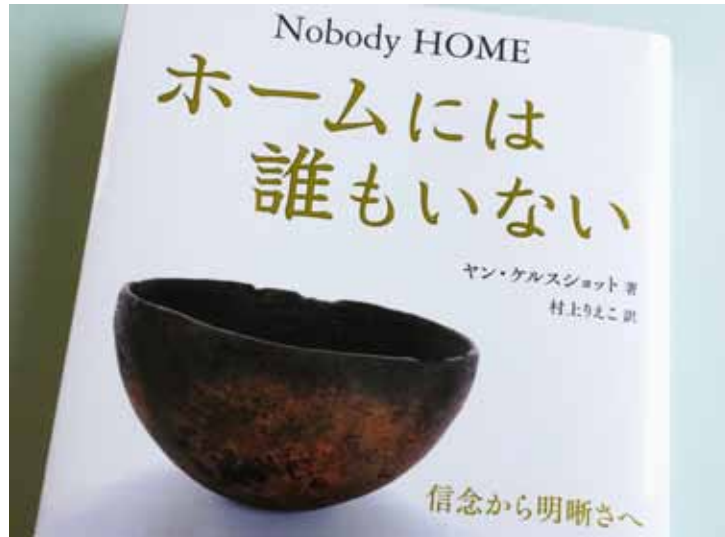
霊が真に復活するとき
わたしもまた復活する

霊が万象となるとき
わたしもまた万象となる

生と死
いのちとものが
霊のなかでむすびあう

mediopos-134

2015.3.29



故郷喪失者とならなければ
故郷のほんとうはわからない

けれどもわたしたちは決して
故郷を後にしたことはない

ノスタルジーはいらない
センチメンタルはいらない

ただここで目をひらくだけ
ただここで耳をひらくだけ

故郷以外の場所はどこにもない
そしてそこにはだれもいない

わたしたちは
故郷のなかで故郷を離れ
永遠をゆく旅人なのだ

■ヤン・ケルスショット『ホームには誰もいない／信念から明晰さへ』（ナチュラルスピリット 2015.3）

「明晰性はごくありふれた日常の側面において手に入るものであり、理論や言葉は不要なのです。言葉はそこにある明晰性を曇らせるばかりです。私たち自身こそが心から追い求めている源そのものなのですから、私たちは源に戻る必要などないことを一人称のビジョンが示しています。つまり、ホームはいついかなるときもここにあるのです。では、ホームがホームに戻ると何が起きるのでしょうか？ 外界では何も変わりません。ですが、内界では私たちのビジョンが確かに変化を起こします。生活の中の最もシンプルな側面において、無限を目にするのです。すべては無限の表現なのですから、超越体験があるかどうか。分離の感覚があるかどうか、それすら関係ありません。結局、私たちはスタート地点に戻ってきました。禅に次のような物語があります。禅を始める前には、川や山をそのまま川や山として見えています。ところが、禅にしばらく専念していると、川は川でなくなり、山も山ではなくなります。そしてついにはまた川や山が戻ってくるのです。／私たちはどこに行く必要もありません。無限はいたるところにあり、何かを付け加える必要もなく、それを見る準備を整えるために変わる必要がある人など一人もいません。幻はたくさんあり、その本性を見抜くことが時に困難を伴ったり、解放感をもたらすこともあるでしょう。ですが、本質的には私たちは元来た地点に戻ったのであり、おそらくはこの旅路も幻なのかもしれません。」

mediopos-135

2015.3.30



■アフエナシエフ『天空の沈黙／音楽とは何か』（未知谷 2011.11）

「聖アウグスティヌスは音楽について、このように述べています。／＜音楽は自由な時間性を備えていると同時に、時間の外に存在するものである＞／でも、本当にそうでしょうか。音楽は、時間の外に存在するのでしょうか。音楽は、時間の囚われてはいないのでしょうか。／音楽は、時間を消滅せんとして、時間の内部に存在するものなのです。クロード・レヴィ＝ストロースは神話と音楽の破壊力を結びつけました。レヴィ＝ストロースに依ると、神話も音楽もどちらも＜時間を消滅させる装置なのだ＞という事です。では、こう仮定してみましよう。音楽は時間を消滅させようと目論むどころか、時間について研究を重ね、真価を探っているのだと。結局のところ、音楽は時間を模倣していることになるのでしょうか。レヴィ＝ストロースが芸術作品について述べる際に使用した言葉を借りるならば、音楽は時間の＜縮小されたモデル＞だという事になります。／では、私たちが時間について知っていることは、どんなことでしょうか。時間の奥行きについて、内に潜むリズムについて。ハーモニーについて、その不動性について、そして自殺へと歩みを勧める傾向について。自由な時間性とは、時間の内部に存在しているのです。」

時間を問う
すると
時間は迷宮となる

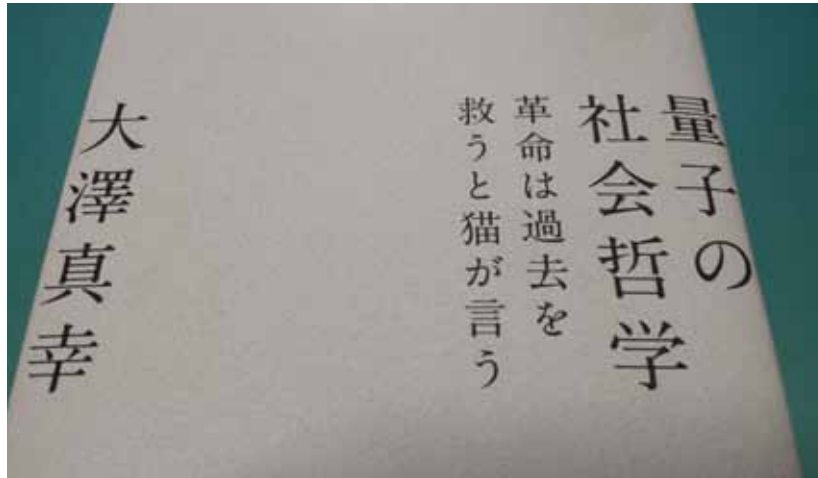
無常のなかで
永遠が見えなくなる

永遠を問うために
時間の奥行きへ

音楽を問う
すると
音楽は迷宮となる

無常のなかで
永遠が聴こえなくなる

永遠を聴くために
音楽の奥行きへ



■大澤真幸『量子の社会哲学／革命は過去を救うと猫が言う』（講談社 2010.10）

「量子力学の世界には、神に比せられる普遍的な観測者は存在しない。とすれば、量子力学的な態度の中には、個別性への関心が支配的であって、普遍性への志向は失われているのか。そうではない。まったく逆である。たとえば、量子力学的な観測を通じて、われわれは、粒子としての物質を捉えることになる。だが、われわれは、それがすべてではないことを知っている（波動としての反面があることを知っている）。観測を通じて、「このX」を捉えたとき、われわれは同時に、「このX以上の何か」「このX以外の何か」を直観するのだ。このように、単一性についての体験の中に常に随伴する、「これですべてではない」「これ以上の何かがある」という残余の感覚こそが、普遍性への通路となっているのである。／量子力学にあっては、真空でさえも単なる無ではない。真空もまた、「それ以上の何か」であって、そこでは、ゆらぎを通じて物質が出現したり消滅したりを繰り返している。これと対応することを、われわれは、親しい<他者>が亡くなったときに体験する。この部屋には、もう彼／彼女はいない（真空）。ただ、彼／彼女が使っていた万年筆やベッドがあるのみだ。このとき、ますます、われわれは彼／彼女の現前を感じてしまう。無に対する残余として、<他者>の存在をむしろ強く感覚するのである。／量子力学では、普遍性は、だから、「これですべてではない」という消極的な残余の形式で察じされるのである。「これ」の向こう側に、積極的に、全知の神を措定しようとすれば（…）、逆に、ある種の無知を――<他者>の生についての無知を――代償にせざるをえない。とすれば、われわれは、次のように言うこともできる。量子力学に至りついたとき、人間は、それについて無知である限りで、神とその下にある人間界の秩序の安寧が保たれるような、恐ろしい深淵を垣間見てしまったのだ、と。」

わたしが見ると
あなたは変わる

わたしの見ない
あなたはいない

あなたが見ると
わたしは変わる

あなたの見ない
わたしはいない

あなたがいないとき
わたしはあなたを思い

わたしがいないとき
あなたはわたしを思い

いないいないばあ
いないいないばあ

いないことで
もっとそこにいる

mediopos-137

2015.4.1



■田中小実昌『ないものの存在』（福武書店 1990.9）

「存在というのはわかりにくい。しかし、こうしているぼく・おまえ、おまえ・ぼく、またはぼくがそのなかにいる世界なんてことを考えると、おぼろげにわかりかけたような気がする。／でも、わかりかけたような気がするみたいなのは、たいへんにいけないことだろう。たとえ論理ではかたづかないと言説でも、そのいい方は論理がとおっていないといけないし、なによりも明晰さをたつとぶ分野で、そんな気がするなんて、めちゃくちゃだ。／だけど、それは、たとえば哲学をする者のことで、たまには哲学ものぞいてみようかとおもう者には、明晰さなどだいじではない、と言われるのかもしれない／（・・・）愕然として気がつくのだが、哲学をする者にはすべてが哲学だろう。たまには哲学をのぞいてみるなんてことはできやしまい。また、たまには哲学からはなれ、息ぬきをするなんてこともない。哲学に生きぬきはない。宗教にも生きぬきはない。イエスとアメンにどこに生きぬきがあるか。（・・・）存在は、いるではなくあるのだろうか。でも、それはただの言い方のちがいではないのか。存在を無にするような生成なんてことをニーチェに関してきいたこともある。しかし、ないものが生成するだろうか。ないもの、存在しないものなんて存在は、存在のうちにはないらぬのか。／ぼくたちがそのなかにいる世界、みたいなこともぼくは言ったが、世界というのもわからない。だから、ぼくたちが世界のなかにいるかどうかもわかりやしない。まさか、ある部屋や建物のなかにいるように、世界のなかにいるわけでもあるまいが、世界のそとにいるのもあるまい。」

あることは
ないことに
ささえられている

ないことで
あることが
わかったりもする

世界はなぜあるのかを問う私がい
私はなぜいるのかを問う私がいる

世界があることは世界の外から
ささえられているのではないか

私がいることは私の外から
ささえられているのではないか

私はなぜ問うのだろうか
私でない私が問うのだろうか

やがてメビウスの輪のように
世界と私は内と外を
ぐるぐるとめぐりはじめる

mediopos-138

2015.4.2



■中村雄二郎『かたちのオデッセイ／エイドス・モルフェー・リズム』（岩波書店 1991.1）

「ゲーテは、《眼は形態を見ているのではない。もっぱら明暗あるいは色彩が浮かび上がらせるものを見るのである》とっており、まさしくここに、色彩とモルフェー（動的形態）の接点がうかがわれる。そして、ゲーテの自然研究の最良といってもいい理解者が、他ならぬ現代物理学のW. ハイゼンベルクであったことは、ほかのなによりも、端的に、ゲーテ自然学の新しさを裏づけているように思われた。（・・・）／色の問題でいちばん私が考えさせられたのは、厳密に言えば、客観的な色というものはありえないということであった。色については、とくに錯視とか主観色とか体内色とかいわれることが多いが、それらはいずれも、ニュートンのな色彩論にもとづいた客観的な色の存在を信じ、また、それを前提にしている。しかし実際には、このように客観的な色は存在していない。だからこそ、色は理論的に扱うのがきわめて難しく、ゲーテが『色彩論』（教示編）の冒頭で引用しているように、昔から《牡牛は、赤い布を広げて見せられただけで凶暴になる。が、哲学者は、色彩のことが話題になるだけで逆上しはじめる》と言われたのであろう。」

わが見る色は
わが色に染まり

わが見る形は
わが色より生まる

わが色は
移りにけりな

されど色
されど形

色即是空
空即是色

わが見る色の
不思議の宇宙



■イヴァル・エクランド『偶然とは何か／北欧神話で読む現代数学理論全6章』（創元社 2006.2）

「サガが「神託」「魔術」「運命」について語っているのに対して、現代数学は「偶然」「カオス」「リスク」を問題にしている。しかしそれらは実は同じ物語を語っているのだ。その物語の起源を遡れば、遠く古代ギリシア時代にたどりつく。その頃は、神託も、魔術も、運命も、偶然も、カオスも、リスクも、すべて「テューケー」というただひとつのギリシア語——この言葉には「存在」という意味もあった——であらわされていた。わたしたち人間は娯楽や知識を求めてこの「同じ物語」を読みはじめる。しかし読み進むうちに、他ならぬわたしたち自身がその登場人物であることを発見するのである。」

偶然がどうして
ここに来たのか

神が告げたのか
魔法使いの技か

起こらぬことは
起こらぬままに

起こることなら
避けようもなく

あるという神秘
ないという神秘

問われることで
答えはあらわれ

偶然という謎が
高笑いしている

mediopos-140

2015.4.4



■北山耕平『ネイティブ・マインド』（地湧社 1988.12）

「よく「風を聴く」などと言う。風の声が聴けることと、聴力がすぐれていることはまったく関係はない。風の声といってもその声は人の内側から来る声であり、近代人が一切その存在を無視し、一切耳を傾けようとすらしないのもまたこの内側から来る声である。私たちの多くは、子供も頃から自分たちが直接に感じることでできないものはなんであれまず疑ってかかるように教育されて育つ。仮に風の声が直感的に聞こえたとしても、そんな馬鹿なことはないと思うか、こんなものにかかっていると立派な大人になれないぞというふうに思い込んでしまうのだ。／（・・・）風は、話をする。これは確かなことだ。／（・・・）なるほど深いところの意味においては、風や太陽や、あるいは神自身が、人間の生活や、生きる意味、目的について、特別に私たちがあらかじめ知らないようなことをことさらに教えてくれるようなことはない。答えはどれもみんなすでに知っていることばかりなのである。それが事実だ。／心理学の新しい潮流であるユング学派の考え方よれば、私たちひとりひとは私たちの祖先が自分のものとして蓄えていたありとあらゆるインフォメーションと知識にアクセスできるという。そしてこの知識をどこまでも遡っていけば、当然この惑星における生命の起源にまで到達するのである。したがって風は話をするというのはそういうことだ。」

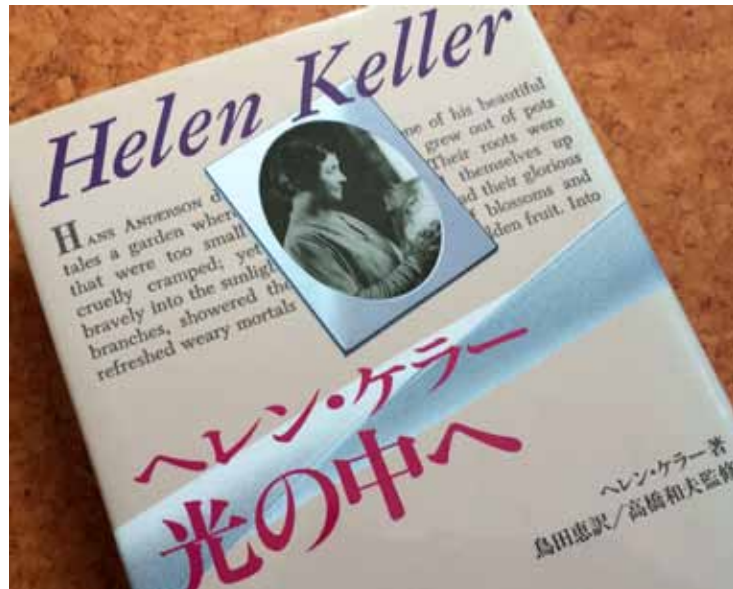
「ひこととで言うてしまうならそれは「グレイトスピリットによって創られたものには必ずグレイトスピリットが入っている」という考え方である。だからこそ彼らは自然の創り出すあらゆる形態や現象をことのほか讃えもしたのだ。動物や植物もすべて兄弟であり姉妹であって、それらがみんなの繁栄と生存をかけて協力しあっている。こうした自分の遠い祖先たちの生き方、聖なる道をよく理解しておけば、あなただってその内なる声に耳を傾ける時の参考になるだろう。」

ネイティブであることは
みずからの源と
つながっていることだ

源からは魂の河が流れ
河と海がつながっているように
天と地をめぐり続けている

見えないものを見る
聴こえないものを聴く
ひらかれた目や耳をもつことだ

過去へと向かうのではない
時空の深みへと遡っていき
そこにみずからを見出すのだ



■ヘレン・ケラー『光の中へ』（めるくまーる 1992.10）

「内的感覚は——お望みなら、神秘的、感覚と呼んでもいいのですが——見えざるもののヴィジョンを私に与えてくれます。私の神秘的な世界は、私がまだ「見た、こともない木々や雲や星や渦巻く流れなどのある可憐な世界です。眼が見える友人たちにとっては何もないところに、私はしばしば美しい花や小鳥や笑いさざめく子供たちを感じ取ります。彼らはいぶかしそうに、私が「海にも陸にもけっしてなかったような光」を見ているのだと言いはります。けれども、彼らの人生にかくもたくさんの不毛の地があるのは、彼らの神秘的な感覚が眠っているためだということを、私は知っています。彼らはヴィジョンよりも、「事実」を好みます。彼らは科学的な実証を求め、それを手にすることができます。科学はたゆみない忍耐をもって人間の起源をサルにまで遡り、満足げにひと休みしています。しかし神はこのサルからスウェーデンボルグのような見者を創られたではありませんか。ですから。生と死が会ってそれらがひとつになるように、科学は霊と出会ってひとつになるのです。」

見えないものが
存在しないなら
私という
ほんとうは見えないものも
存在できないだろう

見えると思っているものは
ほんとうに見えているだろうか
見えないと思っているものは
ほんとうに見えないのだろうか

見えないものが
存在しないなら
あなたという
ほんとうは見えないものも
存在できないだろう

目覚めよ
見えるものを見る力よ
見えないものを見る力よ

目覚めよ
ほんとうに存在する私よ
ほんとうに存在するあなたよ

mediopos-142

2015.4.6



■OSHO『モジュッド／説明できない生をきた人』（和尙エンタープライズジャパン 1990.10）

「生はつねに説明できない。もし、あなたに生があればだがー。もし、あなたがほんとうに生きていたら、生にはあまりにも神秘的ななにかがあるために、それはどのような意味でも説明できない。それには説明文がない。もし自分の生を説明できたら、それは、あなたは死んでいて、生きてはいないということにすぎない。もし自分の生を端から端まで理論的に、系統だてて説明できる人がいたら、その人は一台のコンピューター、機械ではあるかもしれないが、生きては居ないと確信してかまわない。端から端まで説明できるのは死物だけだ。」

「『モジュッド』ということばはすばらしい。それにはふたつの意味がある。ことばの上では、それは<現に在る者>という意味だ。モジュッドとは、内なる現存がある者、醒めている者、油断のない者、意識しているという意味だ。そして二番目の意味は、最初の意味から来ているのだが、現存を生きる者、現在に在る者という意味だ。」

分かるということはいいことだ
けれど分けることで
分けられないものはわからなくなる

なにかひとつ分かったと思う
けれどそのことで
分からないことはふえていくのだ

分かるということとは
分からないことがわかる
ということなのだから

いちばん分からないことは
いまここに私がいるということだ
そして世界があるということだ

それは最初から分かることができない
分かったとすれば
私も世界もそこにはないのだから

mediopos-143

2015.4.7



■カール・ケレーニイ『迷宮と神話』（弘文堂 昭和48年3月）

「迷宮は、それが蒼古たる宗教的監修かもしくはすくなくとも始原的芸術行為の記念物としてあらわれた場合には、そこに多少とも、しばしばきわめて単純なものであるにもせよ、螺旋の形態が認められる。それ自体として独立に描き込まれているにせよ、螺旋の曲折模様として造形されているにせよ、私たちがそれをひとつの道として表象し、いわば無愛想な入り口が通路に入っていくようにそこに身を置いてみれば、たちまちにして一個の迷宮なのである。迷宮の神話学的現実性を喚起するためには、右のように表象し且つ内部に身を置くことを要するのである。神話学的現実性をみずから担っていた人びとにとっては、迷宮とはそのなかに存在していることであり、そのなかで動いていることであった。彼らはときとして迷宮のなかで覚醒して、直接的に体験した意味を概念の言葉に移し変える、無言の動作や物語のなかで胸のうちを打ち明けた。かかる意味をとらえようとするならば、無言の迷宮のための説明文であるそれらの物語をも用立てる必要がある。」

生まれることは
迷宮へと入ることだ

生きることは
迷宮に身を置くことだ

迷宮から出ることが
生きる目的なのではない

迷宮から出るとは
死への旅立ちなのだから

迷宮を螺旋のように歩み
そこで目覚めていることだ

迷宮に身を置きながら
神話の言葉を語れ

mediopos-144

2015.4.8



■渡辺保『身体は幻』（幻戯書房 2014.12）

「身体が溶ける。／そんなバカなと思われるかもしれない。しかし三津五郎にかぎらず。友枝喜久夫でも、四代目井上八千代でも、私の見た名人たちには必ず、そういう瞬間がおこった。／（・・・）身体の輪郭が消えていくのは、踊り手の身体のかなからあふれてくるものがある、それが輪郭をこえて空間にひろがり、客席の私たちを浸してゆくからである。（・・・）／踊り手の身体の輪郭は、この劇場の空間にみちあふれた世界のなかに消えて、ただひたすらそこに世界の幻影のみが残る。踊り手の身体が物理的なモノとしての身体をこえて、その世界のイメージのなかに消えていくのである。その身体はモノから多様な物語を語る幻影になる。「茶壺」でいえば、あの絶対的な正確さの感触である。」

身体は幻なのか

幻なのは身体を見る眼なのだ

それが変わるとき

身体は無から立ち現れる

世界は幻なのか

幻なのは世界を見る眼なのだ

それが変わるとき

世界は無から立ち現れる



■ルドルフ・タシュナー『数の魔力／数秘術から量子論まで』（岩波書店 2010.5）

「ピタゴラスがタレスから学んだことは、われわれは神の力がくだす不合理な判断になすべもなく身を任せているだけではないこと、宇宙が乱雑なカオスではなく、秩序あるコスモスであり、したがってそれを理解することは可能だということだった。そしてここでピタゴラスは（…）当然予想される、そして同時にすべてを決する問を発することになる。そもそも理解とはどうして可能になるのか。いわば「理解の原子」にあたるものは何なのか。どこから理解というものが始まるのか。それ以上さかのぼって説明する必要がないほど単純明快なものは何なのか。もはや何も疑うべきものがないゆえに、疑うべきことが無意味になるような公理とはどのようなものなのか。／ピタゴラスはこの問いに答えられると思った。すなわち、何にもまして基本なこと、それは数を数えることだ、と。なぜなら、1から始めてあらゆる数のそのつど1を足せば次の数がえられる、という数の数え方をいったん理解してしまうと、これ以外の方法で数を数えることなど、もはや想像できなくなるからだ。数を数えることは、人間がいかなる差異をも超えて、まったく同じ方法でなしうる行為だ。（…）何かを本当に理解するとは、とどのつまり、数を数えるのと同程度にまでそれを理解することにほかならない。」

自分の足で歩ける
喜びのように
理解できる！ことは
大きな喜びだ

理解は訪れる
風のように
しらべのように
花の香のように

私は理解する！
けれど理解するのは
私を超えた
すべての私でなければならない

私たちに届けられる
理解という贈り物は
宇宙の秩序となって
天地のリズムを刻んでいるのだから



■前田英樹『定本 小林秀雄』（河出書房新社 2015.3）

「批評することは、その対象の内に己れの心の底を映し出し、意識が消え尽くすまで見入って対象からの言葉を待つことである。それは、己の奥底の声を聴くことでもある。誰もが、ひとつの身体しか与えられていないように、どうにもならない自分の資質を（あるいは怪物を）心に背負って生きている。ここから出発し、ここへ還ってゆくよりほか、批評家が取るべき手段というものはないのだ。小林に対し白鳥が批評の先人として示し切った態度がここにある。」

「『論語』に「下学して上達す」という意味深い言葉がある（『憲問第十四』）。「下学」の語には後世のいろいろな解釈があるようだが、孔子の否定するものが「<上学>」でも言うべき態度であることは確かだろう。「<上学>」がいけないというのではない。そんなものがあり得るはずがなく、あればそれはハツタリだということである。下から、低いところから学んだ者だけが、高い所に達する。そういう意味だ。低いところとは、どこか。己の身ひとつの経験に、直接与えられたものの在る場所だろう。」

遠くまで行こうとするなら
足を鍛えねばならない
ときに走ることもできる足を
ときに跳ぶこともできる脚を

高く登ろうとするとしても
麓から一步一步行かねばならない
高く登ることができたとしても
その後には最初の場所に戻らねばならない

高く築こうとするなら
礎を広く深くつくらねばならない
もっとも高きところにあるものは
もっとも低きところに支えられている

彼方へと行くということは
ここから出発するということ
ここへと戻ることができるということだ
己から出発し己へと戻らねばならないのだ

mediopos-147

2015.4.11



ほんとのバカになれなくて
自分をバカだと言ってみる

ほんとのバカになれるなら
バカにされても平気なのに

バカになれずにごまかして
弱い自分をおどけてしまう

ほんとのバカになれるまで
気どって逃げる弱虫さんで

ほんとのバカになれたとき
ほんとに強くなれるだろう

■河合隼雄+谷川俊太郎『誰だってちょっと落ちこぼれ／スヌーピーたちに学ぶ知恵』（講談社 2004.7）

（谷川俊太郎）「ライナスが「ぼくはバカの中に安住してる」って、これはやっぱりすごくインテリっぽい言い方で……。／実際には、自分をバカだとは思っていないはずなんですよね。だけど、ルーシーに向かっては、こういふに言い返すことができるのが知性、というものですよね。／でも、こんなに知的なライナスが、どうしても安心毛布が手放せないということも、やっぱりインテリの特徴の一つの比喩というふうに思います。／やっぱりインテリっぽい人というのは、すごく弱いところがあるんですね。だから、いざ「おまえは死ぬぞ」と言われたときに取り乱すなんていうのは、ようするに、そのとき、安心毛布がなくなっちゃうということなんじゃないのかな。正解がないとだめみたいなの。」

「ほんとに自分がバカだというふうに思えるというのは、たいへんなことだと思いますよ。みんな口では言うけどね、「私はバカですから」とか。ほんとのバカというのはすごい存在じゃないかと思う。大愚なんて言い方もあるし。／「一番いい解決の方法は問題を避けることだと思う」というのも、インテリの表面に出ないずるさみたいなものを、すごくうまく言っているって感じがしますね。「どんな問題も逃げ切れないほど大きかったり、むずかしかったりはしない」なんて、うがっているなあ。なんだかウディ・アレンのセリフみたい。／インテリというのは、正面から問題に取り組んでいるように見せかけて、じつは言っていることと書いていることは、その問題から逃げまわっているんだと思うことがありますよね。ほんとに心せねばならない。」



■中沢新一 編著『吉本隆明の経済学』（筑摩選書 2014.10）

「吉本隆明は言語の奥に潜む詩的構造を探るだけでは満足せず、経済というものの多くに潜む詩的構造まで明らかにしようとした。そういう探求を通じて、彼は人間の心の仕組みの奥に、「詩的構造」としか名づけようのない活動が行われていることをあきらかにしようとしたのだと、私は考えている。この根源的な「詩的構造」から、いっさいの心的現象は立ち現れる。その活動が言語の機構をくぐり抜けてくるときには、そこに詩が生まれてくる。交換の機構を通り抜けてくるときには、価値増殖が起こる。この価値増殖の現象が、資本主義の基礎細胞となる。／したがって、人間の心の探究においてもっとも確実な方法は、この根源的な「詩的構造」を出発点にすることである、と吉本隆明は考えていた。この考えを言語論に持ち込めば、言語のコミュニケーション機構を出発点にするのではなく、言語の詩的ないし芸術的機能を出発点にする「言語芸術論」というものが、もっとも重要な言語の学問にならなくてはならないだろう。／（・・・）吉本隆明にあっては自分のなかの「詩人性」と自分で納得のできる経済学をつくりだそうとする欲求とは、同じひとつの源泉から湧き出ているのである。」

天と地の贈りものが
売買されてしまう

わたしもあなたも
時間と引き換えに売買される

贈りものである言葉も
記号となって増殖する

聖霊たちの愛も
お金となって増殖する

お金も記号となって
自己増殖を繰り返す

死せる天と地の贈りものよ
その灰から詩の翼を広げるのだ！

mediopos-149

2015.4.13



■『稲垣足穂詩集』（思潮社 1989.3）

「物質に就いて／「自己さ」「みづからの意識といふことさ。なぜなら他を排除することができるといふ幻の上に立脚してゐるものだから」／「どうしてそういふことが起こるかね、それはポイントといふものに対するあこがれなのだ——これは点になつたときにはじめて完全になると考へてゐる奴だ」「より確実に自己を保存しようとする過去だよ。記憶と云つてもいゝね。即ちこゝにタバコなる物質は、つまりさういふ記憶のかたまりさ」]

「生命に就いて／「或るほんやりしたかたちのないものがさ」とb君が云つた「自己を実現しようとする努力——それを生命と云ふ」／決定しようとするものゝなかへ、出来るだけの不決定をおしこんでゆかうとする傾向さ」／「つまり出たらめ？」「さう、自由と云ひ、クリエーションと云ひすべて出たらめをやりたいといふ事のほかには解釈がつかないぢやないか」とa君が答へた。／「そういふ生命のかたちといふのは枝型とちがふかね」／「枝型？」とa君が怪げんな顔をした。／「かたちの本然は枝型さ、イナヅマの樹枝状——木は昏睡してゐる生命さね。樹枝状の自然白金や泥鉄鉱は凝固せる生命さ。この傾向（つまり生命を切断したもの）を逆にたどつて行けば樹枝状も水晶みたいな結晶にまで形式化されるね。それがさらに究極にまで到達すればプラトンの純粹形相さ」]

物質は記憶である

私が物質であるということは
意識であるということだ

私は記憶を積み重ね

みづからを保存しようとするが
そうすることで他を排除してしまう

生命は変わろうとする動きである

私が生命であるということは
変わり続けるということだ

変わり続ける私が

変わらないものを求めて

四苦八苦を繰り返すしてしまう

mediopos-150

2015.4.14



■蜂飼耳『夜の絵本／ルオーの贈り物』（PHP 研究所 2008.2）

「ひとつの顔に、その人の過去も未来も宿らせる。それがルオーの描く顔だ。／絵の人物が、ほとんど無表情のときにも、両目を閉じている場合にも、どんな人なのか、なにをしてきたのか、なにをしているのか、ぼんやりと伝えてしまう。ルオーの絵にあらわれた顔は、観る者の内へ内へと向かい、中心にそっとふれる。／ルオーの描く顔は、がらんとした劇場を思わせる。観客は去った後なのか、それとも舞台は、これから始まるのだろうか。どちらなのかは、わからない。／太めの輪郭、厚く重ねられた絵具。ルオーの批評眼は闇夜の懐中電灯のように、観る人の心を照らし出す。厳しい人だ、と感じる。けれど、つめたくない。だからおそろしい。」

顔は嘘をつこうとするけれど

ほんとうは嘘をつくことができない

悲しいときに笑っても

悲しみはよけいに深くなるばかり

大きなまつげをつけたとしても

ほんとうの目は隠せない

鼻を高く見せたとしても

高くなるのは気位だけだ

顔には時間の奥行きが宿っていて

見えない光と闇が観る人を照らしだすのだ